

2020年度国際学会・シンポジウム開催助成 実施報告書

理工学部専任教授 永井 一清

シンポジウム名	グリーンテクノロジーマーケットプレイス2021 ～ 日本の環境技術の海外移転促進をめざす国際シンポジウム～ Green Technology Marketplace 2021 ～ International symposium for accelerating the dissemination of Japanese Environmental-sound technologies～
開催日時	2021年1月15日（金曜日）15：00－19：00
開催場所	オンライン開催（Zoom会議システムを利用）
主催	明治大学高分子科学研究所
共催	明治大学環境法センター
後援	明治大学国際連携本部，明治大学研究・知財戦略機構， 明治大学技術士会，日本技術士会WIPO Green研究推進会
招待講演者	清水祐樹（特許庁），Er. Tan Seng Chuan（FEIAP, IES, シンガポール）， Marion (Amy) Dietterich（WIPO, スイス），
本学側講演者	諏訪頼正（明治大学高分子科学研究所），小松英司（明治大学環境法センター）， 柳憲一郎（法学部），永井一清（理工学部）
本学司会者	萩原健太（大学院理工学研究科）
通訳者	2名（株式会社インターグループ：日本語と英語の逐次通訳）
参加登録者	241名（参加19カ国：日本，スイス，ベルギー，オランダ，スペイン，ドイツ， イタリア，シンガポール，タイ，フィリピン，ベトナム，中国，ネパール， 米国，メキシコ，アルゼンチン，ケニア，ジンバブエ，モロッコ）
開催趣旨	主催の明治大学高分子科学研究所は，国際連合の専門機関である国際知的 所有権機関（WIPO）が運営する環境技術の海外移転を促進する取り組みで あるWIPO GREENのAdvisory BoardメンバーであるPartnersとして2019 年に認定された。本国際シンポジウムでは，世界知的所有権機関（WIPO） によるWIPO GREENをはじめとしたグローバルな取り組みのなかで，①い かにして日本の環境技術の海外移転を実現するのか，②それによるアジア 太平洋諸国の持続可能な開発や持続可能な開発目標（SDGs）の実現に向け た研究課題とその解決策について，科学技術の社会実装に必要な施策・ 法規制や財政措置等の社会制度の視点を取り入れ，国内外の多様な研 究者・専門家を集めて議論する。
配布資料	開催案内および講演者の配布資料のダウンロードサイト http://www.isc.meiji.ac.jp/~polymer/marketplace/index.html

実施報告

定刻になり，司会の萩原健太が参加者に対して事務連絡を行った。そして主催者の永井一清の開催の挨拶があり，本シンポジウムの趣旨説明ののち，参加者と講演者に対し謝意を述べた。

まず始めに，清水祐樹様による基調講演を行った。我が国とWIPO GREENとの関係について

SDGs の観点から説明され、そのなかで特許庁がアジア太平洋地域の知財庁として初めて WIPO GREEN のパートナーとなったこと、同じくパートナーである日本知的財産協会や日本弁理士会はその会員に対して、発明推進協会は主に中小企業、大学などに対して、WIPO GREEN の普及活動を行っていること、さらに今後の展望においてシンポジウム後半部のパネルディスカッションにつながる日本からのニーズ登録の必要性についても述べられた。

続いて、第 1 部「日本およびアジアにおける環境技術開発の状況」に移り、永井一清が「高分子科学を中心とした日本の環境技術開発の状況」と題して講演を行った。高分子科学、特に国際的に注目されている地球温暖化問題やプラスチック問題について、科学技術で解決できる問題と科学技術で解決できない人のモラルの問題について整理した解説があり、今後の消費者である一般の方々への啓発活動を含めた今後の展開について述べた。そして Er. Tan Seng Chuan 様が「アジア域における環境技術のベストプラクティスの展開」と題して講演を行った。シンガポールの特に 1960 年代からの廃棄物処理への取り組みが紹介され、インフラ整備と社会システムの最適化について具体的な導入例とともに ZERO WASTE NATION に向けての将来像について述べられた。

第 2 部「日本の環境技術の海外移転に向けた WIPO GREEN の活用」では諏訪頼正が「WIPO GREEN の概要と日本からの貢献」について、WIPO GREEN の設立に向けた提案からその後の展開における日本の取り組みについて時系列を追って説明するとともに、後半のパネルディスカッションに向けて議論テーマの提案をした。小松英司と柳憲一郎が「WIPO GREEN を活用したオープンイノベーションモデル」と題して講演を行った。特に気候変動に焦点を当て、持続可能な社会を全世界で実現するため最も適切なエリアでの実施を謳った。これは、Er. Tan Seng Chuan 様のインフラ整備と社会システムの最適化に通じるものであった。

休憩 15 分を挟み、第 3 部「パネルディスカッション」に移った。パネルディスカッションに先立ち、Marion (Amy) Dietterich 様が「WIPO GREEN の今後の展望と日本への期待」題して講演を行った。現在の WIPO GREEN の活動と、2021 年からの展開について紹介があった。特に現在のパートナーズやステークホルダーとの関係強化と、プラットフォームとしての WIPO GREEN の位置づけと活用について議論の提案がなされた。続いて、諏訪頼正をモデレータに日本の環境技術の海外移転促進に向けて講演者全員によるパネルディスカッションを行った。ブレインストーミングを経て、議論の論点をつぎの 2 点とした。一点目はニーズ情報をどのように集めるかであった。先進国からはシーズ情報の提供の一方通行であるためでもある。二点目は、技術移転の実現に向けた資金面での援助についてであった。一点目については、アジア諸国の技術士会を中心とした取組みについて Er. Tan Seng Chuan 様から発言があったが、明確な答えを出すことができなかった。本当に求められていることを見つけて理解することの難しさを実感し、今回のシンポジウムの開催の趣旨である、特に技術移転先の途上国の方々とのコミュニケーションが大切であるということを再認識させられた。二点目については、Marion (Amy) Dietterich 様から欧州グリーンディール政策の概要とそれに関連する取り組みが紹介され、経済を環境にやさしいものに紐づけていくヨーロッパ諸国の覚悟が述べられた。Er. Tan Seng Chuan 様からグリーンファイナンスの最近の具体例の説明があり、世界銀行を含め、環境にやさしい経済、政治へ各国の金融機関が舵を切っていることが確認された。そしてモデレータの諏訪頼正が、途上国のエキスパートが既に ODA（政府開発援助）による支援ではなく、ビジネス化に向けたファンドを求めていることに言及した。一点目の論点のニーズも地域により異なることから地域毎の事情を意識した協力について共通認識を持ち、“誰一人取り残さない”ことを誓いパネルディスカッションを終えた。

最後に主催の本学を代表して柳憲一郎が閉会の挨拶を行った。パネルディスカッションでの議論も踏まえ、今回取り上げたアジア太平洋諸国だけではなく、グリーンテクノロジーマーケットプレイスのアフリカ、南米諸国などへの今後の展開の必要性とともに、本シンポジウムへの多くの参加者と講演者に謝意が述べられた。

充実した議論により予定終了時間（18：30）を 30 分超過した 19：00 に閉会した。

以上